国際協力特別賞

六年前あの一言で

海星学院高等学校　３年　市橋　治騎

「もし君に困ったことがあればいつでも日本に助け行くからな。」これは、私が帰国する際、ミャンマー人の友人からもらった言葉で今でも大切にしている。

私は、小学校四年生から六年生まで父親の仕事の関係でミャンマーのヤンゴンに住んでいた。当時は世界から「アジア最後のフロンティア」として注目され、アウンサンスーチー氏を筆頭に民主化が進み、経済発展が著しかった。日本企業を始め、世界中の企業が、続々進出し、気付けば日本人学校の生徒も三年間で一・五倍に増えた。あれから六年、私の大好きなミャンマーが大変な状況に陥っている。

ロヒンギャ族を巡る宗教迫害。新型コロナウイルス感染症流行の影響による観光客の減少。ミャンマー国軍におけるクーデター。政情不安による外国の企業の撤退。世界の多くの国からミャンマーに対しての批難の声が高まっている。

「今、ミャンマーの人たちが困っている。」私は、ミャンマーの友人に電子メールを送ったが友人からの返信はない。

「もし君に困ったことがあればいつでも日本に助けに行くからな。」この言葉が帰国後、日本の生活に慣れるまで、心の拠り所だった。ミャンマーの友人が苦しい今、可能であればミャンマーに実際に行き、デモによる負傷者やロヒンギャ族の孤児を救いたかった。

しかし、新型コロナウィルス感染症の影響により入国が制限されていることからそれは叶わない。日本にいながらミャンマーをサポートする方法を模索した。今の私にできることは、多くの人々にミャンマーが抱える現状を伝え、ミャンマーを含め発展途上国について関心を持ってもらうことだった。

私は、学校の総合的な探究の時間において難民問題に対して調査する機会が与えられた。全校生徒を対象に難民問題のアンケートを行い、次の結果が見られた。「難民問題を知っているか。」という項目について「知らない」と消極的な回答の割合が七割であった。また、「難民者を自国に受け入れることについて賛成である。」という項目について肯定的な回答が八割であった。これらの調査結果から、私の学校の生徒は「他国の問題に対しての関心はそれほど高くないものの困っている人へは支援したい。」という思いを持っている人が多いことが分かった。ミャンマーや世界で起きている難民問題はどこか遠い国で起きている出来事であり、自分事として捉える人は少ない。しかし制服のワイシャツやパンツのタグにはミャンマーを始めとする発展途上国が多く見られている。

私は、難民問題など国際問題への関心の低さを改善するために「ソフトパワー」という言葉を学ぶ必要があると考えた。ソフトパワーとは、「自国が望む結果を他国も望むようにする力であり、他国を力で無理やり従わせるのではなく話し合いによって味方に付ける力。」である。身近で言えば、全世界で日本食文化の浸透もソフトパワーの一種である。

私は、このソフトパワーを利用して国際問題解決の手助けになると考えている。昔友人の言葉で意識が変わったように、無関心な人たちが身近な危機だと自覚させていくことが必要だ。そのために、私自身が積極的現状と課題を発信していかなければならないのだ。だから私は、ワークショップのような気軽に意見交流できるコミュニティーを作りたい。

私にとって、ミャンマーの友人からかけられた一言は持続可能な国際社会の実現のために私にできることは何かについて考えるきっかけを与えてくれた。私は、世界中の人々の悲鳴や声なき声に耳を傾け、その現状を多くの人々に認識し理解してもらえるよう発信していきたい。いつか世界平和が実現し、日本と自由にミャンマーの往来が可能になるよう微力ながら発展途上国との懸け橋になっていきたい。これが私にできる彼への恩返しだ。